

私立キリスト教大学を思う

佐々木 哲夫

学校法人宮城学院理事長・学院長・宗教総主事

「フォルムがたえず自由を喚起する」は三島由紀夫の言葉である。フォルムが創造主体を刺激するという。であるならば私立キリスト教大学のフォルムは、主体である教育共同体の存在や活動の創造源でもある。フォルムの三要素の私立・キリスト教・大学を概観することによって私立キリスト教大学を掘り下げてみる。

「私立」は自由と責任を伴う。1620年プリマスに着いたメイフラワー号の乗員102名の約3割の30名が未成年者だった。アメリカ移住を決意した分離派がオランダで経験した課題は、自分たちの信仰や文化を子弟にどのように継承するかであった。プリマス到着16年目に早くも牧師養成や子弟の学校教育が始まった。やがて、資金や蔵書を寄付した人物の名を冠したアメリカ最古の大学ハーバード大学へと成長してゆく。ピルグリム・ファザーズたちの子弟教育の使命観は宗教改革のものでもあった。以前は修道院や聖堂においてカトリック教会の児童や

婦女子の教育がなされていた。「神は両親を通して、両親と共に教育を行おうとして、家政・親権という秩序を設定させた」と宗教改革者ルターは考えた。親の教育優先権を神学的に明らかにしたのである。しかし、親をそのまま教育者とするのではなく、有効で正しい教育のためには公による学校が神の要求に応えるべきと考えた。また、それは公の職務上の義務であるとも考えた。神への奉仕と人々への奉仕を目的とする学校教育は、必然的にキリスト教学校設立へと結びついた。

「キリスト教」は基盤である。寄付行為に記されている建学の精神には、学校設立の理念や教育の目的が示されている。私立学校存在の基盤は、創立者の人物にではなく創立者が有していた理念すなわちキリスト教信仰にあった。課題は、教派の伝統を尊重しつつ今日においてそれをいかに正しく継承し実践するかである。第1は、私的ではない、公の校事としての学校礼拝の存在である。説教と礼典を

行う学校教会の設立は必然であるが、礼典のない学校礼拝での説教は、学校が立ちも倒れもする礼拝の要である。第2は、聖書に関する必修科目の存在である。講義は、教室で語られるものであるが故に、キリスト教文化の紹介にとどまらず福音や説教を裏付ける学問的確証にふれることが肝要である。第3は、組織を実際に運営する人材である。教派の伝統に配慮しつつも理事会や宗教主事などの要職に年齢適材を配置するよう心砕かねばならない。学校と諸教会との連携は重要になる。

「大学」は人間を創る。西洋は、十字軍によつて当時の先進文化アラブと遭遇した。アラビヤ語書籍などにより医学、数学、天文学、建築など多くの知識を吸収し、農業や産業の進展につなげた。やがて、古代ギリシア哲学やローマ法の復興期を迎えた。古典自由七学芸などの高等教育は永続的な学問機関にまでは組織されていなかった。ローニヤやパリにおいて学部や学寮や学科課

程を備えた教育機構が整えられた。学芸学部、神学部、法学部、医学部の4学部から成る大学の始まりである。神に奉仕し人々に奉仕する人材の養成である。哲学部や自然科学部の創設に象徴される諸学の独立は19世紀のドイツの大学からのものである。神学部を持たず実学の工学部を併設する大学の設立は、1886年の帝国大学令による帝国大学「東京大学」が史上初である。他方、1863年の横浜のヘボン塾「明治学院」や1875年の同志社英学校設立など日本各地にキリスト教学校が設立される。

今日、中等教育における学力は「知識、技能」「思考力、判断力、表現力」「学習態度」の三要素に定められている（学校教育法30―2）。知識を学び、それをを用いる知恵を得る。さらに、知識と知恵を備えた主体の人間性を涵養する。それは、私立キリスト教大学の教育目的と共鳴する。